

Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

No.
56

発行日：2014年9月1日

発行者：田中 真 / 編集者：小笠原 宏司 / レイアウト：鈴木 博文

持続する同窓会活動に向けて

上智大学英語学科同窓会 会長 田中 真

今年も無事に「オール英語学科の集い」が終了し、同窓会活動の1年が始まりました。それぞれに仕事を持ちながら、活動に貢献してくれる常任委員各位には感謝の言葉もありません。また、同窓会イベントの度に参加していただいているOB/OGの皆様のご支援にもあらためてお礼を申し上げます。

私たちの同窓会は、卒業生全員が会員となりますが、活動の原資となる会費は任意で支払っていただいていることが、昨今の同窓会収支が逆ざやになる一つの要因です。過去には会員名簿の提供という会費徴収の大義名分がありましたが、今日では個人情報保護の理由からそれも叶わず何をもって会費とするかという議論が続いています。

毎年安定した収入を求めるのであれば、まず会員予備軍である学科生に対して同窓会の存在を知らしめ、学位授与式の時点で会費を取ってもらうことが最善策ではないかと考えています。後輩たちに対して私たちがすることは何かと考えてみれば、卒業後の人生を考える手伝いをするのではないのでしょうか。この観点に立ち、今年度は各界で中堅として活躍する会員と学科生の橋渡しをすることにいたしました。

今年度より卒業して間もない若手が3名常任委員に就任し、常任委員会も大きく若返りました。彼らの力を借り、学科とのつながりをより密にできるよう活動致します。またOB/OGの集う場所として恩師による講演会を複数回開催する予定です。これまでに菅原先生、ドイル先生に登壇いただき、その後の懇親会も含め参加者の方々に大変好評でした。

外国語学部各学科同窓会とも連携を模索し、持続性のある活動を進めてゆく所存です。

5月25日（日）のASFで、「オール英語学科の集い」開催！

5月25日（日）、毎年恒例の上智大学のホームカミングディである「ASF（オールソフィアンの集い）」の開催にあわせて、「オール英語学科の集い」を開催いたしました。

当日は、午前10時より年次総会を開催し、2013年度の会務ならびに決算の承認をいただき、同時に、2014年度会務計画および予算案についても承認いただきました。

続いて午前11時から、1987年英語学科卒業で経営コンサルタントの神田正典氏を講師に迎え、『なぜ上智からベストセラー作家が多数生まれるのか？英語力は、日本語文章力の突破口！』というテーマでご講演いただきました。ベストセラー作家たる所以が垣間見えるような、非常に軽妙かつ明快な語り口に、どんどん引き込まれていくお話をいただきました（講演の詳細は次ページの報告をご覧ください）。



講演と並行し、STP（サマーティーチングプログラム）の現役学生による小学生を対象とした模擬授業が行われました。当日は小学生に加えて幼稚園児の参加もあり、最初はやや硬さが見られた子供たちも、STPの学生たちのリードによってどんどん緊張がほぐれていき、最後には廊下にまで響き渡る笑い声が出るほど熱中してくれていたのが印象的でした。

続く懇親会では、軽食やお飲物をご用意し、世代を超えた卒業生や現役学生たちが思い出話や近況報告に花を咲かせました。また、懇親会の中で、STP各地域の代表の学生に、現在の活動についてパワーポイントなどを活用しながら、紹介していただきました。会の最後は、恒例となっている吉田研作先生のギターと鈴木博文さんのウクレレによる歌の合唱で締めくくり、来年のこの集いでの再会を誓い合いました。（笹沼 雅由子）



『オール英語学科の集い』 神田昌典氏講演会

「なぜ上智から多数のベストセラー作家が生まれるのか？」

英語力は、日本語文章力の突破口！」

日時：2014年5月25日（日） 11:00～12:30 会場：3-123教室



今年度の講演会は神田昌典氏（87外英）をお招きしました。氏は、学生から社会人までの幅広い聴衆を前に、英語学科から外務省入職、その間の留学を経て経営コンサルティング、著述業に至るまでの様々なエピソードを交えながら、親しみやすい口調で主に次の3点に力点を置いてお話しくださいました。

【概要】

まず、日本語の文章力を向上させるには、英語という異なった言語の論理性と情緒性を理解することが肝要である。なぜなら、英語を通して考えることにより、私たちの多くが第一言語（母語）として当たり前のように使っているがために気づかない日本語の特性（長所・短所）に意識を向けることが可能になるからである。上智大学が多くの作家・文筆家を輩出しているのはそのような理由からであると考えられる。

第二に、上智大学の教育で最も心に残っており、現在の自分の生き方の礎とも指針ともなっているものの一つは、当時必修科目であった「人間学」である。学生として受講しているときは正直なところそれほど感銘を受けていたわけではないが、社会人になってから、そこにこめられた人間愛のメッセージと人間に対する洞察力にあらためて気づかされる。

第三に、上智大学の卒業生が他大学の卒業生と異なる点は、起業家マインドとでもいふべきものであり、それこそが上智を上智たらしめる「SophiansのDNA」と言っても過言ではない。それは、明治維新から四半世紀ほどの1903年、インドで宣教活動を行っていたドイツ人イエズス会士ヨゼフ・ダールマン師が日本に上陸、大学を作るという夢を抱き、1905年にローマ教皇ピオ10世に謁見、イエズス会士派遣による大学設立の約束を得て、その後出身も活動地も全く異なる3名のイエズス会士（ダールマン師に加え、中国で活動していたフランス人アンリ・ブシェー師、アメリカで宣教活動を行っていたイギリス人ジェームズ・ロックリフ師）が来日、ソルボンヌ大学に留

学していた日本人土橋八千太師なども加わり、1913年に上智大学を設立したという、建学の経緯にまで遡ることができるのではないかと。

そして、そのようなDNAの発露の一環として、ICTやSNSを活用した全く新しいNPO活動 “100% MAD” をご紹介くださいました。ICTやSNS上のリンクをクリックすることで、私たちがコーヒーを1杯飲む程度のお金がポリオワクチンを必要としている子供に直接届くようなシステムが開発されています。これは、DMによる募金活動や発展途上国政府への寄付といった、従来の、往々にして無駄が多く、また、真に援助を必要としている人々に資金が行き届かないといった問題を回避することができる点でも画期的です。

1時間以上にわたる講演に対し、会場からは様々な質問が寄せられ、氏はその一つ一つに真摯にお答えくださいました。

最後に、神田氏の直筆メッセージ・サイン入りの近刊をSTPの企画に参加している現役英語学科生を中心とした10名、および来場の方から抽選で8名にプレゼントしました。氏はお忙しい中、引き続き開催された懇親会にもご出席くださり、参加者と談笑しながら意見交換を続けていらっしゃいました。ありがとうございました。（漆原 朗子）

【神田昌典氏プロフィール】

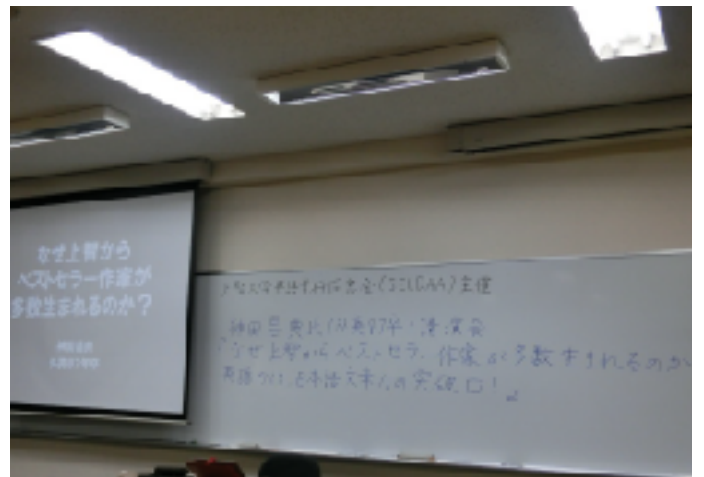
経営コンサルタント・作家

日本最大級の読書会『リード・フォー・アクション』主宰

1987年、上智大学外国語学部英語学科卒業。ニューヨーク大学経済学修士、ペンシルバニア大学ウォートンスクール経営学修士。

大学3年次に外交官試験合格、4年次より外務省経済部に勤務。戦略コンサルティング会社、米国家電メーカーの日本代表として活躍後、1998年経営コンサルタントとして独立。『GQ JAPAN』（2007年11月号）では、「日本のトップマーケッター」に選出。2012年、アマゾン年間ビジネス書売上ランキング第1位。

現在、ビジネス分野のみならず、教育界でも精力的な活動を行っており、公益財団法人日本生涯教育協議会の理事を務める。



SELDAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。SELDAホームページをご参照の上、会費の納入をお願いいたします。

会費納入
のお願い

英語能力テスト (TEAP) 開発の意味

上智大学言語教育研究センター
教授・センター長 吉田 研作

現在、TEAP (Test of English for Academic Purposes) という英語能力判定テストがメディアでも取り上げられるようになってきましたが、これはどのようなテストなのでしょう。実は、もう10年以上前に、当時学務部長だった英語学科の松尾先生が、上智の英語のテストは質的にも良いものなので、それを基に、Sophia英検のようなものが作れないだろうか、という提案をされました。しかし、上智の教員だけでいわゆる妥当性と信頼性という要件を満たすような科学的なテストは作れない、ということで、この提案はいったん断ち切れになりました。しかし、5年ほど前の入試委員会で、再び英語の試験をなんとかしたい、という話ができました。上智の教員だけでは作れなくても、テスト開発のプロと一緒に可能かもしれない、ということで、私が当時英検の理事をしていたことから、英検協会に構想を持ちかけました。すると、英検からやりましょう、という返事があり、テスト開発に取り掛かることになりました。

このテストの特徴は、①4技能が測定できるテストであること、②日本のように、英語が外国語として学ばれている環境にある大学で（英語圏の大学ではなく）、英語を使って勉強や研究をするために必要な英語力が測定できること、③学習指導要領の目標を考慮していること、そして④中高の英語教育に対してポジティブな波及効果をもたらす可能性が大であること、などがあげられます。

いくら日本の英語教育を改善しようと努力しても、現在のような「入試」がある限り、非常に難しいことは誰もが認めることでしょう。入試そのものの在り方を変えなければならないのです。ところで、現在各大学が実施している入試の殆どは、「技能」としてはリーディングのみが対象とされ、それ以外は、文法や単語の「知識」のみが問われているため、中高の現場では、リスニング、ライティング、スピーキングがあまり教えられていない、という現状があります。先日発表された文科省のデータによると、高校の英語は原則として英語で行うことになっていますが、新学習指導要領が適用されている高校一年でも、授業を大体英語で行っている先生の割合は、全国平均でわずか15%程度という結果が報告されました。逆に、47%の先生は、授業の半分以上を日本語で行っている、と答えています。つまり、それだけ大学入試の在り方が高校現場の英語指導に大きな影響を与えている、ということなのです。

個別の大学の入試問題と比べると、センター試験の英語はより英語を使って文章を理解することが求められていますし、わずかとは言え、リスニングの試験も入っていますので、良くなっていると言えるでしょう。ただし、センター試験のリスニングは、全体の25%に過ぎず、また、ライティングやスピーキングは入っていませんので、結局はリーディング中心のテストになっており、高校の先生からすると、リーディングができるためには、まず文法訳読を通して日本語で英文の意味を理解することが大切だ、ということになるのです。


そんな中で、教育再生会議等、政府の会議体では、TOEFLのような英語能力判定テストを入試の基準にすることを提唱してきました。考えてみると、Harvardに入るための英語の入試はありません、Georgetownに入学するための英語の入試もありません。どこの大学に入るにしても、TOEFLやIELTSのような、4技能テストの結果



が採用されます。ならば、日本においても、4技能で英語能力が測定できるテストがあり、その結果をどの大学も共通に使うことができれば、それが一番合理的なはずで、勿論、センター試験はそれを目的に作られたわけですが、年に一回しか受験できず、しかも、試験が終われば、即、問題が公開されてしまうため、テストの信頼性や妥当性についての十分な検証ができず、毎年平均点が変わることからも分かるように、「標準化」できないのです。しかも、2技能しか測定できず、現在の中高の英語教育を変えることができないのです。

ところで、TOEFLやIELTSのような国際的に認められたテストがあるので、それを使えば良いのではないかと、という人がいますが、問題は、難易度と、それらのテストが英語圏の大学（生活も文化も考え方も全て英語圏のものを前提とする）でどれだけ英語で勉強や研究ができるかを見るために開発されたもので、日本のような環境を想定していない、ということにあります。日本の高校生の英語力の平均は英検で言うとうまく準2級にいくかいかないかです（ヨーロッパ共通参照枠のA1からC2のスケールでいうと、A2からB1にかかる程度です。ところが、TOEFLなどが最も識別力を持つのは、準1級と1級の間（B2とC1）です。日本の高校生が受験してもあてずっぽで解答するしかないレベルで、英語力は測定できません。

TEAPは、実際に4技能のiBT TOEFLと4技能のTEAPを両方受験してもらった学生たちの結果からすると、両者の間の相関は、.874という非常に高いことがわかりました。つまり、基本的に両テストは同じ内容の英語力を測定している、ということが iBT TOEFLよりも若干優しいテストになっています。同じアカデミック英語能力を測ってはいますが、iBT TOEFLで言うと、100点（120点満点）ぐらいまでは測定できるがその上はTEAPでは測定できない、ということになります。ちなみ、昔の



SELDAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。SELDAホームページをご参照の上、会費の納入をお願いいたします。

会費納入
のお願い

ITP TOEFL(リーディングとリスニングのみ)とTEAPの2技能の間には、.94という非常に高い相関がみられますが、677点満点のITP TOEFLで言えば、TEAPはその大体600点ぐらいまでのレベルにおいて、より正確に測定できるテストになっています。つまり、TOEFLとは同じような英語能力を測定しているながら、少し低いレベルの識別に強いテストになっているのです。なお、TEAPのリーディングとリスニングとセンター試験の2技能(250点満点)について言えば、TEAPは各技能100点で計算していますので、2技能ですと200点満点ですが、センター試験で満点(250点)をとっても、TEAPでは、大体130点ぐらいにしかならないことも分かりました。それだけセンター試験が易しい、ということになるのでしょうか。

TEAP以外にも現在は、ベネッセのGTEC-CBTなど4技能テストも出てきていますが、今のところ、TOEFLとの妥当性検証を行っているのはTEAPだけです。上智を受験する高校生は、各学部用に作られた質的に異なるテストのための傾向と対策に無駄な時間を費やすのではなく、TEAP一本でどこでも受けられる、というのが上智大学の全学入試です。また、TEAPは学習指導要領の内容にもそっていますので、普段の授業で学習指導要領通りに4技能を使って先生が英語を教えていれば、特別な受験準備(問題に慣れる以外)はいらない、ということにもなるはずなのです。そうなれば、ひょっとすると英語で授業を行う先生の割合も今よりずっと高くなるのではないかと期待しています。

常任委員就任にあたって

保田 俊実 (2011年卒業)

この度SELDA常任委員会として、英語学科同窓会に携わらせて頂くこととなりました2007年入学の保田俊実と申します。同窓会活動という形で再び“外英”に戻ってくることができ非常に嬉しく思います。

「英語を駆使し、世界中を飛び回るような仕事がしたい」との思いを抱き、上智大学外国語学部英語学科の門を叩いた2007年のことを今も鮮明に覚えています。海外旅行経験すらない、生粋の“純ジャパ”であった私は入学当初(卒業までずっと?)同期の豊かな国際経験、語学力に圧倒され、いつも刺激を受けていました。周囲に大いに影響を受け、学生時代はイギリスへの交換留学、STP(Summer Teaching Program)カンボジアの創設等、先生方、上智大学関係者、OB/OGの力を借りながら、文字通りグローバルな学生を送ることができました。

私にとって“外英”は、素晴らしい仲間との出会いと貴重な国際経験を積むことが出来たとても大切な場所です。SELDA常任委員として、“外英の仲間”である皆様のお力をお借りしながら、外英の更なる発展に微力ながら貢献していきたいです。また学生と同窓会との懸け橋として、学生に“外英”の魅力を再認識していただけるような活動に携わることができればと思っております。

今後とも宜しくお願い申し上げます。



【編集後記】この晩夏、映画「Godzilla」が人気となった。1954年に誕生して60年目、これまで何度もリメイクされてきた。一方、大学受験で利用した方も多であろう1957年に設立された大手予備校が、大幅な校舎の閉鎖に踏み切った。環境の変化への経営対応が遅れたとのこと。

「健全なる存続」のための変化、そして改革。「外国語学部英語学科」のこれからの役割についても学内外で熱心な議論が続けられている。勿論、単に環境の変化に対応するというだけの意図ではない。卒業生として、あなたならどんな英語学科の未来設計図を描くのだろうか？

Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

No.
56

発行：上智大学英語学科同窓会 〒102-8554東京都千代田区紀尾井町7-1上智大学英語学科事務室気付
Tel. 03-3238-3719 Fax. 03-3238-3910 URL. <http://www.seldaa.net>